

スピノザの認識論

桐生 華江

序

41 スピノザの認識論

本論文では、スピノザの考える「認識」(cognitio)について論じたい。スピノザの認識論に私が興味をもったのは、彼の『知性改善論』(Tractatus de intellectus emendatione)を読んだことがきっかけであった。この著作は彼の初期の作品である。そこには、私たちの認識についての方法が書かれており、認識する際に使う「観念」(ideæ)が分類され説明されている。しかし、この作品は未完で終わっている。彼の認識論はどこへ行ってしまったのかというのが私の最初の疑問であった。私は、その行き先が彼の最後の作品『エチカ』(Ethica)であると考えた。『エチカ』

第二部では、『知性改善論』のように観念や認識の方法の説明ではなく、そこからさらに視野を広げて人間精神という観点から、認識するということはどのようなことか、また認識にはどのような種類のものがあるかといった問題を考察している。ところが、不思議なことに、スピノザは倫理学とも訳される『エチカ』において、認識論を展開しているのである。なぜ倫理学と認識論が結びつくのか、これが新たな疑問として湧いてくるのである。

この新たな疑問に答えるためには、『知性改善論』の冒頭の次の文章に着目する必要がある。

Postquam me Experientia docuit, omnia, quae in

communi vita frequentem occurrunt, vana, & futilla esse : cum viderem omnia, a quibus, & quae timebam, nihil neque boni, neque mali in se habere nisi quatenus ab his animus movebatur, constitui tandem inquire, an aliquid daretur, quod verum bonum, & sui communicabile esset, & a quo solo, rejectis caeteris omnibus, animus afficeretur ; imo an aliquid daretur, quo invento, acquisito, continua ac summa in aeternum fruere laetitia. (T 5)

「一般生活においてたびたび起こるすべてが空虚で無価値であるということ、恐れていたものの原因あるいは対象と認識していたものすべてが、善でも悪でもなく、ただそれ（善あるいは悪）によって魂が動かされた限りでは善あるいは悪を持つということを経験によって教えられた時、私はついに決心した、それ自分で私たちが共有することのできる真の善で、その他のすべてを捨てて、魂がそれだけによって揺り動かされるあるものが存在しないかどうか、むしろ、あるものを発見し獲得したなら、無限でかつ最高の喜びを永遠に享受するようなあるものが存在しないかどうか、探

究しようということ。』

ここでスピノザは、「無限で最高の喜びを永遠に享受できる或るものが存在しないかどうかを探究する」という決意を述べている。この決意こそは、『知性改善論』の出発点であった。ここから推測されるのは、スピノザが「認識」を最高の喜びや善へと繋がるものと考えており、これを念頭においた上で、自らの認識論を、倫理学や感情論を示した『エチカ』へと繋いでいったのではないかと考えてある。そこで以下では、『エチカ』に見られるスピノザの認識についての見解を分析し、人間の認識と人間の幸福との関係を説明することにした。これらの二点を中心にして、スピノザの認識論を考察しようと思う。

第一章 「エチカ」における認識論

『エチカ』では、認識の方法だけでなく、認識とはどのようなものかということが論じられる。認識する側の視点からだけでなく、精神とそれを取り巻く世界がどのように関係しているのかという視点から、この問題が解明される。それでは、スピノザは認識というものをどのように捉

えていたのだろうか。

第一節 認識とは何か

スピノザは、様々な観念をもとにして認識論を展開する。その中で重要なのが、「妥当な観念」である。彼はどのような場合に「妥当な」(adæquata)という言葉を用いているのか。「妥当な原因」、「非妥当な原因」についての彼の定義を例にとつて、まずこの点を明らかにしたい。第三部定義1によれば「ある原因の結果がその原因だけで明瞭判然と知覚される場合」、この「原因」のことを「妥当な原因」と定義するのだという。また、「非妥当な原因」とは、原因が「それだけでは理解されない」(per ipsam solam intelligentiæ)場合の原因のことだが、これを「あるいは部分的」「原因というように」、「非妥当な」という言葉と「部分的な」という言葉を並べて表現していることもある。これからして、「妥当な」という言葉には、そのみで理解するのに十分なという意味があるのではないかと考えられる。つまり、妥当な観念とは、真の観念のすべての特質、あるいはそのすべての内的特徴を有するため、それだけものを理解するのに十分な観念だと言えるのではないか。第2部

定理34では、「我々の中において絶対的なあるいは妥当で完全な観念はすべて真である」と述べられる。これは、定理11系と定理32から浮かび上がる定理である。定理11系をみると、私たちの精神の中に妥当な観念を有するならば、神の中にその観念があると言える。それは、神が人間精神の本質を構成しているからである(第2部定理11系)。それゆえに、私たちが妥当な観念をもっていれば、その観念は神の中にあることになる。また、定理32では、神に関するすべてのことは真であるとされているから、第2部定理34の命題が成り立つのである。

では、「妥当である」とはどのようなことなのだろうか？ スピノザは、妥当にしか考えられないものとして、「共通概念」(notiones communes)を挙げている。この共通概念とは、どこから浮かび上がってくるのか。まず、私たちに妥当と考えられるものとして、「すべてのものに共通であり、等しく各物体の部分の中にも全体の中にもあるもの」(第2部定理38)や、「人間身体および人間身体が刺激されるのを常とするいくつかの外部の物体に共通かつ特有であるもの」(第2部定理39)が挙げられている。これらは神の中で妥当であり、定理11系より、私たちはこれらを妥当に知覚するのである。また、「妥当な観念から精神のうちに生起

するすべての観念」も同時に妥当である(第二部定理40より)。こうして、スピノザが妥当であると考ええる条件として、「共通」であることが浮かび上がってくる。

次にスピノザは、人間が物事を知覚し、「概念を形成」するには、言い換えれば、認識するには三つの手段があるとしている。その三つの手段、つまり三種の認識がどのように異なるのかをこれから見ていこう。

i. 意見 (opinion)、表象 (imaginatio)

この認識は、「感覚を通して毀損的・混乱的にかつ知性による秩序づけなしに我々に現示されるもろもろの個物」(Ex singularibus, nobis per sensus mutilate, confuse, & sine ordine ad intellectum representatis) によつて生じて「漠然とした経験」(experientia vaga) により起こるものである(E78、第二部定理40、備考2)。つまり、私たちが日常の中で知覚し、概念していることはほとんどこの第一種の認識にあたると考えられる。また、虚偽(誤謬)の唯一の原因である(第二部定理41)。なぜなら、この認識には「非妥当な」「混乱した」観念のすべてが含まれているからである(定理40、備考1)。このことから、私たちが普段感覚的に知覚していること、また読む、書くなどして想起し

たことの観念は頼りないものであることが分かる。

ii. 理性 (ratio)

「事物の特質について共通概念あるいは妥当な観念を有する」(notiones communes, rerumque proprietatum ideas adaequatas habemus) ことによつて起こる認識である(E78、第二部定理40、備考2)。この第二種の認識は第一種に比べ、しっかりとした秩序、根拠に基づく認識である。第二種の認識は、第三種の認識と共に「必然的に真」(necessario vera) であり(第二部定理41)、真偽を区別することができるとされる(第二部定理42)。なぜなら、第二種の認識は妥当な観念を持つていなければならぬからである。このことから、理性によつてなされる第二種の認識は妥当であり、すべての人々に共有されることができる認識であると考えられる。

iii. 直観知 (scientia intuitiva)

第三種の認識、すなわち直観知は、「神のいくつかの属性の形相の本質の妥当な観念から事物の本質の妥当な認識へ進む」(procedit ab adaequata idea essentiae formalis qurandam Dei attributorum ad adaequatam cognitionem

essentiae rerum) (E 78、第二部定理40、備考2)とされている。第二種と共に「必然的に真」であるとされ(第二部定理41)、真偽を区別するとされている(第二部定理42)。この認識は、第二種の認識よりも確実性を持った認識であると考えられる。なぜなら、神の属性によつて起る認識であるからである。第一部から、すべての原因は神であり、神なしには何も考えられないということは分かっている。そして、この世界の認識についても思惟は神の属性、つまり本質であり(第二部定理1)、人間精神も神の知性の一部なのである(第二部定理11系)。

ここで、もう一度スピノザの『知性改善論』で示されていた認識の方法を思い出してみたい。彼は、事物の本質を理解することが認識であるとし(94節)、正しい認識の方法は、その事物の真の観念を理解する、ということであるとしていた。このことから、『エチカ』で述べられる「直観知」とは、スピノザが考える本当の認識へと人間を導くものではないかと考えられる。つまり、この第三種の認識は、以上の三種の中で最も正しい認識の段階を表しているのである。

認識とは何であるかを見てきたところで、スピノザが考える最も確実性をもつ認識とはどのようなもののかをさ

らに考えてみたい。『エチカ』の中で彼は、大きく分けて、確実な認識をするための三つの条件を挙げている。

まず、第一の条件は「真の観念」を有することである。これは、『知性改善論』でも示されている。スピノザは、ある事物の「真の観念」を持つということが、その事物を確実に理解することだと考えていた(『知性改善論』33節)。では、どのように考える根拠は何なのか。それが示されているのは、『エチカ』第二部定理43の次の文章においてである。

“Qui veram habet ideam, simul scit se veram habere ideam, nec de rei veritate potest dubitare.” (E 79)

「真の観念を有する者は、同時に、自らが真の観念を持つていると知っていて、かつそのこと、真理に関して疑うことができない。」

なぜスピノザは、人間のもつ「真の観念」が確実性をもつと強く主張するのだろうか。これは、神と人間精神が関係し合っているという彼の考え方からきていると思われる。私たちがもつ「真の観念」は、第二部定理11系より、

神が「人間精神の本性によって説明される限りにおいて、あるいは神が人間精神の本質を構成する限りにおいて」
(quatenus per naturam humane Mentis explicator, sive quatenus humane Mentis essentiam consistit) (E 50)
 神の中で妥当であるような観念だと考えられる。また、第二部定理20より、神は「思惟の属性」であるから、人間精神についても神の中に観念がある。つまり「真の観念」は神の中にも存在するのである。そして、第二部定理32より「すべての観念は神に関係する限り真」であるから、「真の観念」をもつ、ということとは各々の主観的な見方としての「真」ではなく、「完全に」、「最も善く」認識する、ということなのである。

第二の条件は、「必然として事物を観想すること」である。第一部定理29によれば、すべてのものは「必然的に」存在する神の本性から「必然的」に生起している、とされている。観念(精神)と物体(身体)の関係については第2部定理7の並行論の考え方により、同一の秩序からの連結である。従って、必然性をもって生起する事物を必然として認識することが、「事物をそれ自身ある通りに知覚すること」であり、「真実に」知覚することなのである。

最後に第三の条件として、「ある永遠の相のもとに」

(*sub specie aeternitatis*) 知覚することが挙げられる。彼の考える「永遠性」と「必然性」は互いに関係し合っていると考えられる。なぜなら、第二部定理44の系2によれば、事物の必然性は、「神の永遠なる本性の必然性」そのものであるからである。つまり、第二の条件である「必然として」事物を認識すること、「ある永遠の相のもとに」知覚することとが関連しているのである。永遠の相のもとに認識するとは、時系列では区切ることでできない認識のことである。

第二章 認識と倫理学

前章では、「エチカ」における認識論をみてきた。しかし、「エチカ」とは、その名前の通り、倫理学に関わる著作である。その第一部「神について」においては形而上学が、また第2部「人間精神の本性とその起源について」では認識論が主に展開される。実際に感情論が示され、倫理学が論じられ始めるのは第三部「感情の起源及びその本性について」からである。なぜスピノザは *Ethica* (倫理学) という題のついた書物において、彼の形而上学と認識論を詳しく述べているのであろうか。この章で私は、彼の認識論と

倫理学がどのように関係しているかを考察するが、これによってその疑問にも部分的に答えることができよう。

第一節 理性的に生きるといふこと

有徳な行為をすることは、妥当な認識から切り離すことができない。今この前提に立てば、前章の三種の認識のうち第二種、つまり「理性」による認識は、徳と密接に関係していることになる。つまり、人間の感情と行為にとつて、第二種の「理性」による認識はとても重要であり、前者は後者から切り離すことができないのである。では、この「理性」は私たち人間を、どのような感情や行為へと導くのだろうか？

第一に理性は、私たちを「善」(Bonum)へと導く。第四部定理24では、理性の導きに従って行動すること、理性の導きに従って生活すること、自己の有を維持することが、みな同じことを意味するとしている。このように「理性の導きに従って」行動したり生活することは、「自己の有を維持する」ことが決して利己的に行動することではないことを証明してくれるはずである。第四部定理35をみてみたい。

“Quatenus homines ex ductu rationis vivunt, eatenus tantum natura semper necessario conveniunt.” (E 188)

「人間は、理性の導きによって生活する限り、ただ本性に必然的に一致する。」

各々の人間が、「本性上常に必然的に一致する」ということは、各々の求める「善」が一致するということである。なぜなら、私たちは妥当な認識をする時、私たち人間の本性から明瞭判然に事物の本質を知覚するから(第三部定義1より)である。したがって、各々の人間が求める利益が一致する、ということが言えるだろう。

第二に、理性は人間を「自由」へと導くと考えられる。なぜなら、理性に関係する感情はすべて「喜び」と「欲望」だけであるからである(第三部定理59)。理性に関係する欲望とは、「勇氣」(animositas)と「寛仁」(generositas)であり、前者は「自己の有を維持しようとする」欲望、後者は他の者を援助し、「交わりを結ぼうとする」欲望である(第三部定理59備考)。いずれも、理性の指図に従ったものである。このように、理性の指図に従えば、自分の欲す

るように行爲することができると考えられる。「恐怖」などの感情に駆られて行爲することも、理性に従つていれば起らないのである。つまり、理性に支配された人間は、自由なのである(一)。

第二節 認識と至福 (beatitudo)

『知性改善論』冒頭で、スピノザは「不断最高の喜びを永遠に享受できる」ものを探究する決意を示し、認識の方法を展開していった。それゆえ、序論でも述べたように、彼の認識論が人間の幸福ないし至福 (felicitas) とどのように関係しているのかを考察するのは価値がある。そこで、手短かにではあるが、この問題を考察しておきたい。

まず、スピノザにとつて最高の認識がいかなるものであるかを確認する必要がある。第四部定理28では、*Summum Mentis bonum est Dei cognitio, & summa Mentis virtus Deum cognoscere.* (E 184) 「精神の最高の善は神の認識である、そして精神の最高の徳は神を認識することである。」と述べており、この箇所の証明で、彼は「神」を認識できる最高のものとしている。つまり、最高のものである神への認識は、最高の認識なのである。では、私た

ちはどのようにして神を認識することができるのだろうか？

私たちは神を、第三種の認識すなわち「直観知」において認識し(第五部定理25)、永遠の相のもとに認識する(第五部定理30)。「直観知」は、神の妥当な観念から妥当な認識へ進むものであった。つまり、この第三種の認識で物を認識するということは、神へと認識を進めることであった。また、なぜ永遠の相のもとに認識することが神の認識かと言えば、第一部定義8で、神の存在そのもの、つまり神の本質は「永遠性」であると考えられるからである。この、最高の段階とされる神への認識は、神への愛である。それは、第三種の認識から「最高の満足」が得られるからである(第五部定理27)。

次に、人間の至福とはどこに存在するのだろうか。それは、「神に対する恒常・永遠の愛」(*Amor aeternae erga Deum*)¹⁾、あるいは「人間に対する神の愛」(*Amor Dei erga homines*)²⁾ (第五部定理36備考)において存在する。なぜなら、第三種の認識からは、「最高の満足」が生じ(第五部定理27)、最高の満足は「最高の喜び」であるからである(第五部定理32)。

神への愛が人間への至福につながると考えられる理由につ

いてももう少し考えてみたい。スピノザは、人間を争いへと導いたり、悩ませたり苦しめたり嫉妬させるのは、「富」や「名誉」のような、いつかは消えてなくなってしまうもの、真の意味では手に入らないものを人間が愛するからだと考える（『知性改善論』10節、『エチカ』第五部定理20、備考）。裏返して言えば、スピノザは「永遠」なるものへの愛にこそ、人間の至福が存在すると考えているのである。第五部定理20の備考では、神に対する愛は、「すべての感情のうちで最も恒久的である」としている。なぜ最も恒久的なのかと言えば、神は「永遠」だからである（第一部定義6）。神が消えてなくなるといふことは、スピノザによれば、考えられないことである。永遠、無限である唯一の実体である神を愛するということは、人間の苦しみや悲しみ、嫉妬などのわずらわしい感情から精神が解放され、その結果、精神が、感情に支配されずに、「受動」(passio)ではなく「能動」(actio)として活動することができるといふことである。この状態こそが、人間にとつての最高の至福なのである。

結 論

本論文では、スピノザの認識論の内容をやや詳しく分析

し、人間の認識と人間の至福の関係を彼がどのように捉えているかを手短かに考察した。そこで最後に、スピノザが人間の認識と人間の至福の関連性をいかに重視したかを今一度確認することによって、彼の「永遠の相のもと」での認識の意義を明確にしたい。すでに見たように、『知性改善論』の冒頭でスピノザは、無限で最高の喜びを永遠に享受できる或るものが存在しないかどうかを考察することを決意し、その上で認識の分析を開始したのであった。このことが示しているように、スピノザは、正しく認識し真理へたどり着くことと、人間の至福との関係を見出そうとしていた。さらに、彼が『知性改善論』で述べていた人間の最高の喜びとは、「永遠に」喜びを享受することであり、これとは対照的に、富や名誉といった日常私たちが追い求めてしまう対象は、一度手に入れたとしても失ってしまう可能性があるものである。スピノザは、私たちがそれら欲望の対象を失ってしまった時、悲しみや苦しみという感情に精神を支配され、理性的な生活を営むことができなくなってしまう、と『エチカ』第四部で説明している。つまり、私たちが通常求めるそのような欲望の対象は、目先の幸せしか与えないのである。それでは、本当の幸せ（すなわち彼によれば永遠に続く幸せ）は、どこに見出されるのだろうか

か。

本論文の第二章で述べたように、その幸せは神への愛において、神の人間への愛においてに見出され、結局は、神を認識することにおいて見出される。神を認識するには、私たちは「ある永遠の相のもとに」認識しなければならぬ。なぜなら、神は永遠であり無限であるからである。このように考えると、人間の至福まで人間がたどり着くためには、「ある永遠の相のもとに」ものを認識しなければならぬことになる。これは、私たちが今まで見てきたように、真なる認識をするのに必要な条件である。永遠の相のもとに認識することとは、過去を認識することでも現在を認識することでも、未来を認識することでもない。どんなに時間が経ったとしても、「ある永遠の相のもとに」された認識は変わらない。これからして、私たちは永遠であることが、必然であり、真理であるということを知る。そして、正しく認識する、ということが結果として人間の至福に繋がるということを踏まえて、スピノザはそのための方法、すなわち知性を改善する方法を「知性改善論」で示そうとし、さらに「エチカ」においては、精神の能力の限界（いかに精神が感情に支配されてしまうのか）を論じた上で、理性的な生活法を示し人間を永遠の幸福へと導こう

としたのである。

〔付記〕

この論文は卒業論文「スピノザの認識論」の第一章、第二章、結論の内容を圧縮し、それに修正を加えてできあがったものである。使用した文献や引用箇所の表記方法は、次の通りである。

1. スピノザの著作と翻訳は次のものを使用した。Spinosa, *Tractatus de intellectus emendatione/Ethica*, Spinoza Opera Bd. 2, hrg. von Carl Gebhardt, Heidelberg 1925. スピノザ著、畠中尚志訳「知性改善論」、岩波書店、一九六八年。スピノザ著、畠中尚志訳「エチカ・倫理学」、岩波書店、一九五一年。
2. 「」の付いた日本語の文章は、畠中尚志氏の訳文である。
3. 「」の付いた日本語の文章は、筆者自身がラテン語原文を和訳したものである。
4. ラテン語を引用するにあたって、本論文の文章にあわせる必要上、ときおりもとの単語の格を変更して引用せざるをえなかった。

5. 出典を記す際には、『知性改善論』にはT、『エチカ』にはEという略号を用いた。例えば、(E 15) は Ethica の15ページからの引用であることを示す。
6. 『知性改善論』について説明する際に(一節)、(二節)などの区切りを用いたが、これはスピノザではなく訳者の畠中氏がつけた節の番号である。

〔注〕

(1) スピノザは、特に個人においてよりも、国家において人間は自由であると述べている(第四部定理73より)。国家において人間は、共通の法律を守ろうとするからである。

(2) 第一部定義6参照。神は「絶対に無限」な存在であり、「永遠・無限の本質を表現する無限に多くの属性から成っている」実体である。